『偽娘恥辱㊙部屋』

ミン・ウォン

2019年11月30日(土)～12月29日(日)
12:00-19:00 *金土日のみ開廊
プロダクション：アサクサ
助成：公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京

オープニングイベント
11月29日(金) 18:00-20:00 レセプション
11月30日(土) 13:00-14:00 「ピロートーク」昼の部
18:00-19:00 「ピロートーク」夜の部

アサクサは、ベルリン在住のアーティスト ミン・ウォンによる個展『偽娘恥辱㊙部屋』を開催いたします。映像、インスタレーション、パフォーマンスの手法を用いて、ワールドシネマと大衆文化を語り直してきたミン・ウォン。作家自身が俳優となり不完全に翻訳された再演を行うことで、ジェンダー意識がいかにして構築され、再生産され、循環し、表象のポリティクスに流れ込んでいくのかを考察してきました。この夏、東京で制作された最新作は、性愛を描く大胆なストーリーと演出で知られる成人映画「日活ロマンポルノ」を題材にしています。本作では、「偽娘（にせむすめ）」になりすましたミン・ウォンが映像のワンシーンに参入し、ファルスへの跪拝と悦楽のクライマックスに向かう男性中心の視線を侵犯し、逸脱することで、映画史が加担した性的ヘゲモニーをクイア化することを企図しています。

日活ロマンポルノは、1971年から1988年まで全国上映された大衆向けピンク映画であり、その後の日本の映像文化を支える多くの映画監督や役者を輩出したことで知られています。本作ではこのシリーズから、『赫い髪の女』（1979年、神代辰巳監督）で謎多き女を演じる宮下順子、『一条さゆり 濡れた欲情』（1972年、神代辰巳監督）で勝気なストリッパー役を演じる伊佐山ひろこ、過酷な緊縛シーンをこなすSMの女王 谷ナオミ——を取り上げ、三人三様の方法で男性視聴者の想像力を掻き立て、欲情の対象となったの映画のシーンが繰り返されます。

この3人の女優を「再演」し、本作の伏線となるのが、ミン・ウォンが演じる「偽娘」と呼ばれる異性装者の存在です。1980年代から日本の少年誌作品に見られるようになった中性的キャラクターに端を発し、女性的な容姿をもつ男性を意味する「男の娘（おとこのこ）」は、中国語で「偽娘(ウェイニアン)」と呼ばれ、2010年以降インターネット上に急激に広まりました。本作の撮影は、偽娘がアジア圏のサブカルチャーに拡散した現代のデジタル動画の制作方法と同時に、ピンク映画の黎明期に低予算で行われた早撮りの手法を参照し、オンラインで購入した最低限の機材——クロマキー用のグリーンバック、リングライト、ライトボックス——と一台のiPhoneのみを用いて行われました。

大衆文化はテクノロジーの発展によって衰退（そして復活）させられる運命にありますが、日活ロマンポルノを終焉へと追いやったのもまた、80年代初頭に始まった家庭用ビデオ再生機とアダルトビデオ（AV）の普及でした。ポルノ専門の上映館は姿を消し、映像と射精の享楽空間は家庭内に持ち込まれ、現在ではソーシャルネットワークが提供するメディア空間が重要な一端を担っています。偽娘はSNS上で莫大な人気を博す一方、彼らの存在は政治的な監視の目に晒されており*注、社会的には「秘めごと」であり続けています。

本展『偽娘恥辱㊙部屋』では、身体、ジェンダー、そのパフォーマティブな振る舞いの実験の場が、会場となる建築空間とオンラインメディアのプライベート空間を交差し、70年代と現代の異なる時代を行き来しています。偽娘の「恥辱」を含み抱えたこの一室は、ポルノ映画の歴史から奪い返した欲望の領域となり、クイアソフトポルノという新たなジャンルを照らし出します。鑑賞者は、輝く数十台のスマートフォンの画面越しに、彼女の「秘め事」を目撃することになるでしょう。

本展開催に合わせ、11月30日(土) にはオープニング記念パフォーマンスとして、アーティストによる親密な会話がささやかれる「ピロートーク」を開催。また会場では、ミン・ウォンがポルノ女優を演じる2020年月めくりカレンダー「色暦偽娘恥辱㊙部屋」(展覧会カタログ) を販売いたします。皆様のお越しをお待ち致しております。

「ミン・ウォン来日制作」は、公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京の支援により実現しました。

＊2019年9月、中国発のスタートアップ企業ティックトック（TikTok）はLGBTQ+を支持する内容を禁止する新たなルールを設けるに至り、中国現政権から圧力によるものと考えられています。

ミン・ウォン:《偽娘恥辱㊙部屋》(2019年). 映像スチル.

2020年カレンダー『色暦偽娘恥辱㊙部屋』発売!

展覧会場にてお買い求めいただけます。

ポルノ女優を演じるミン・ウォンの月めくりカレンダー・書き下ろしテキスト付・A5 サイズ 2,300円(税込)

「偽娘」大谷美葉インタビュー

以下のインタビューは「偽娘」として主演をつとめた谷美葉の舞台の一部である。浅草の木造アパートでひっそりと暮らす女の部屋の壁は、ドラッグの歌姫の切り抜きや写真で埋めつくされ、ときどきアーティストの芸術的な舞台衣を纏い出てくる。ピンク色のカーテンが風にたなびく、どのようにしてこの美男で花を咲かせたのでしょう?自分の世に気づき、スターの地位に駆け上がるまでの過程はどうだったのでしょうか?

大谷 昔はどこにでもいるような者が通り入りでしたよ。東京に出てきてからも、ただ、心の中では考えて、人とは違った何か面白い人生を送りたいと思っていて、田舎には一度戻ってこられないようなくらいの覚悟でいました。その現地に逃げるためにいろいろなんを無切りとなきゃならなくて、家族やお金もね。でもそのおかげで、本当の男の子から「偽娘」になったのも、失うものは何もありませんでしたから。自尊心も処女も捨て、裏を捨てて社会のメインストリームに戻しているなかに、裏を捨てる、ということもなかった。ただ旅しかなかったのは「冒険さ」だけ。もちろん仕事は成人映画期のもぎりだったけど、そこは人生の学校で、自由を手に入れるための扉だったとかでも思っています。

今も公演中に年齢に応じることはあるのでしょうか?

大谷 脱ぐことは難しいとしかない。「でもそこに観客の新型や妄想を刺激するような熱のある色気を織り込んでいくことは難しいとって、長い目で見れば、それがストリッパーの醍醐味でもあるんです。オーガズムの絶頂生みたいなもので、アプローチの仕方は同じ。ピンクの乳首は同じ。ただ、乳首が止まるほどの、何だか面白くなっちゃうんだ。でもとてつきたものでしょう、デジタルのトランスボディで出来たシンプル製のストリッパーが、目だけでなくて、あそこまで抜けるなんて。

細は深い出発点はどこで眠られましたが、情景と熱をどうお考えですか?

大谷 レイプものや拷問ものを演るときは、仮想とした表現ができるような音楽を聴くことにしてるの。カウンターテーノーが歌うバロック音楽がオススメ。例えばグイグルディとか。音楽を聴くと、物事をゆっくり動いていた過去に戻れるっていうか、床に就いてから目覚めるまで、ロウクの光に照らされながら、時間をかけて情熱をかけたくなってどこかゆっくりの声は、男にも女にも風にしていなくて、子供の無邪気さと三角的な誘惑の間を行ったりとろを漂っているみたい。子供の無邪気さとは、ゆっくりと、こうした音のパターンとか音楽に乗ると、聞いたことのない身体が解くなって、肉体的な音楽から解放されるんです。聞が縛られていて身動きが取れなくても、頭の中では解くなっている感覚というか、加粉とともに知んでいく体はもちろんないんです。裸を今頃さが、ある種の「純粋さ」の高みへと誘れて行ってくれるのですから。

アーティスト：

ミン・ウォン（1971年、シンガポール生まれ）は、ヴィデオ、インスタレーション、パフォーマンスの手法を用いて、ワールドシネマと大衆文化を語り直し、映画言語、社会構造、アイデンティティ、内省といった幾つもの層を重ね上げていく。物語の登場人物一人一人がキャスティングされ（多くの場合は作家自身が俳優となり一人何役もこなす）、不完全に翻訳された物語が再演される。人間のパフォーマティビティという行為を参照し、「真正性」「オリジナリティ」「他者」という概念を解きほぐすことで、文化、ジェンダー、アイデンティティがいかにして構築され、再生産され、循環しているか、そして表象のポリティクスにいかにして流れ込んでいるのかを考察する。俳優としての専門教育を受けたわけではないが、映画から影響はミン・ウォンのアートの実践に色濃く反映されており、パフォーマティビティ、ジェンダー、そして差異の物差しとの絶え間ないダイアローグが続けられている。近年のプロジェクトはより分野横断的な様相を呈し、パフォーマンスとインスタレーションは融合され、世界中に溢れる文化的産物への作家の飽くなき探究がより生々しく浮かび上がる。

近年の展覧会に、アジア・アート・ビエンナーレ（台中、2019年）、釜山ビエンナーレ（韓国、2018年）、ダカール・ビエンナーレ（セネガル、2018年）、ダッカ・アート・サミット（バングラデシュ、2018年）、SAVVY コンテンポラリー（ベルリン、2018年）がある。主な個展に、UCCAユーレンス現代美術センター（北京、2015年）、資生堂ギャラリー（東京、2013年）、REDCAT（ロサンゼルス、2012年）、原美術館（東京、2011年）など。また、シドニー・ビエンナーレ（2016年、2010年）、アジア太平洋トリエンナーレ（2015年）、上海ビエンナーレ（2014年）、リヨン・ビエンナーレ（2013年）、リバプール・ビエンナーレ（2012年）、光州ビエンナーレ（2010年）、パフォルマ11（ニューヨーク、2010年）などに参加。2009年には第53回ヴェネチア・ビエンナーレのシンガポール館代表に選出され、個展『ライフ・オブ・イミテーション』にて審査員特別表彰を受賞。

www.mingwong.org

キュレーター/プロデューサー：

アサクサは、40平方メートルの一般住宅を改築したプロジェクト・ スペース。2015年10月創設以来、共同キュレーションとその実践を推進する現代アートのプログラムを企画。公的機関や個人支援者と協力しながらインディペンデントな活動を続け、ポーリン・ボードリ/レナート・ロレンツの個展(2017年)、リクリット・ティラヴァーニャ、オノ・ヨーコの二人展(2017年)、ヒト・シュタイエルの上映・トークイベント(2018年)などを開催する。2018年より、アーティストを浅草へ招聘し、共同リサーチと新作制作のサポートを開始。アントン・ヴィドクル、ジョシュア・オコン、ミヌク・イムらと協働する。

www.asakusa-o.com

プロジェクトチーム：

制作：大坂紘一郎、三上真理子
ポストプロダクション：ネイサン・エヴァレット・エンジェル
協力：小林勇輝（出演協力）、佐藤史織（撮影補佐）

助成：

公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京
プロジェクト名「ミン・ウォン来日制作」

展覧会情報：

タイトル：『偽娘恥辱㊙部屋』
英題：Fake Daughter's Secret Room of Shame
作家名：ミン・ウォン / Ming Wong
会場：アサクサ
住所：東京都台東区西浅草1-6-16
会期：2019年11月30日(土)〜12月29日(日)
12:00 - 19:00 ＊金・土・日のみ開廊

展覧会カタログ（2020年カレンダー）：

コンセプト／アートディレクション：ミン・ウォン
パフォーマー：ミン・ウォン、小林勇輝
編集・翻訳：大坂紘一郎、三上真理子
デザイン：阿部原己（Tanuki）
英文校正：ジェイム・マリー・デイヴィス
発行日：2019年11月
企画・発行：アサクサ

イベント情報：

タイトル：オープニング記念パフォーマンス「ピロートーク」
会期：11月30日(土)
昼の部13:00-14:00、夜の部18:00-19:00
会場：アサクサ
住所：東京都台東区西浅草1-6-16
連絡先：info@asakusa-o.com

URL：www.asakusa-o.com
Facebook: https://www.facebook.com/asakusa.o/
Twitter: @asakusa_o, #asakusa-o
Instagram: asakusa.o

プレス連絡先：大坂紘一郎・三上真理子
info@asakusa-o.com
090-8346-3232 (大坂)

ARTS COUNCIL TOKYO